

カントの空間論

上田 徹

この論文はカントの空間論の成立過程を明らかにし、『純粹理性批判』（以下『批判』と略す）との内的な関連を問うことを意図している。空間論が『批判』にとっての重要な出発点のひとつであるのは明らかである。カント哲学を批判期、前批判期に区分する場合、我々は1770年の『感性界と知性界の形式と原理について』（以下『就職論文』と略す）をその境界と考えることができるが、カントは、そのなかで全く独創的な空間把握を明らかにしており、同時に主観における感性と悟性の峻別も行った。我々はこの『批判』に発展する基本的枠組みがはじめて与えられているのを見る。従って、空間把握はカント哲学の発展段階に明白な区切りを与えた主題であったといえる。

カントの哲学がこのような経過で構築されていったのは決して偶然ではない。カントが批判哲学の形成に至る以前——前批判期には、空間把握の問題が特に哲学的議論の対象にされねばならない事情があったのである。それは、まさしく古代から引き継がれてきた空間論争である⁽¹⁾。

空間論争とは、有機的統一体として秩序づけられた古代ギリシア以来の「閉じた」世界概念が、16世紀において、コペルニクスに象徴される天文学の大革新によって破壊され、無限で「開いた」世界概念に転換したさいに生じた、哲学における胎動である。この論争には、多くの哲学者、神学者が参加する。だが、そこで重要なのは、個々の哲学者たちの哲学的立脚点の相違が、彼らが空間に与えた存在論的意義の相違に応じて明らかになるということである。

18世紀において、空間把握の相違から生じたニュートンとライプニッツの論争も、その一例である。カントは前批判期において、彼らの空間把握のうちどちらを支持すべきかという問題に直面していた。ニュートンは、事物の現存在から隔離し、我々の知覚しえない「絶対空間」を主張していた。これに対し、ライプニッツは、1715年から翌年の彼の死まで、ニュートンの代理人であったS. クラークと書簡による論争を行い、「絶対空間」に対して、事物の秩序をそのまま空間とする考えによって応戦した。そして、このライプニッツの合理主義的な空間把握は、彼の死後も、大陸において多少の歪曲を受けながら引き継がれていった。しかし、カントが前批判期を通じて支持し続けたのは、ニュートンの空間把握であった。カントは前批判期の論文のあちこちで、ライプニッツ学派への反論を述べて、彼らの空間把握を退けている。だが、最終的には、さきに述べたように、カントは全く独自の空間把握を提出する。その空間把握は全く独創的であったので、空間論争はその意味を喪失してしまったほどであった⁽²⁾。

ところで、カントが意味を喪失させたのは、空間論争とともに、この論争の基盤にあっ

た形而上学の諸原理でもある。すでにふれたが、空間の存在意義の決定には、その哲学者の根本的な教説が関係する。17世紀におけるデカルトとH. モアの論争はその典型例である。彼らの空間把握の相違に見られる対立点は、相互の哲学の原理的相違を表しているのである。

デカルトは周知のように、精神と物体の二元論を立てた。彼は「物体即延長」として、延長としてとらえられる世界から精神を排除し、延長として知覚される事物に対応させて空間という概念を理解した。そのために、デカルトは、空虚な空間を認めることができず、物質で充満した機械論的世界を構想したのである。しかし、それに対してモアは、デカルトのように精神と物体の対立を認めることができず、両者ともに延長物であると主張した。そしてモアは、精神が延長ならば神もまた延長であると考え、デカルトと異なり、物質の存在しない空虚な空間も、自存する延長物としての神を根拠として存在を認められると考えたのであった。当時の存在論的議論のなかでは、世界（空間）の無限性は、モアに見られるように、神の無限性との類比によって理解され、その結果、空間は神聖化されるのが常であった。なぜなら、空間を存在論的に独立した実体として見なすためには、神の自存性が空間にも与えられねばならなかったからである。デカルトは、知覚によって物体（延長）が把握されなければ空間も把握されることはないと考え、空間を「無際限なもの」とはしたが、それ自体「無限なもの」とは考えなかった。しかし、モアは空間を神聖なものと認めたために、それを物体の現存在から独立した非物体的基体としてとらえることができたのである。モアは、この聖化された空間に、無限、不動、等質、不可分、唯一といった神のもつ特性を与えた。こうして空間と神は同一視された。そして、モアが与えたこれらの特性は、のちにスピノザやマルブランシュが彼らの神に注ぎ込んだ特性にもなった。

確かに、我々の知覚を越えて世界に透入する「精神」としての空間は、神との類比でとらえられるのにふさわしい。この点で、空間の存在論的意義の決定は、当時の個々の哲学者にとって、神を世界のうちに見出すか、否かという「存在神学」の議論と関係をもってくる。どちらの問題も、その哲学者の根本的な教説に関与する問題である。

我々が哲学史をひもとけば、カントは、なによりも「あらゆる存在神学の論証の批判者」として哲学史上に座を占めている。「存在神学」固有の問題領域は、形而上学的意味での「事象性」(Realität)と「現実存在」(Existenz, Dasein)との関係を問うことにあった。そして、そのような問いの現れる場が、最高存在としての神の实在論証の妥当性を巡る議論であった。カントはそれらの議論が無意義であることを明らかにした。従って、当時、神の世界への位置づけが、空間把握の問題と深い関連をもっていたとするならば、カントの主観に内在化された空間把握が、形而上学の諸原理、および存在神学の批判に欠くべからざる契機となっていることは想定されてもよいだろう。事実、カントは前批判期において、1763年には『神の現存在の論証の唯一可能な証明根拠』(以下『神の現存在論証』と略す)、さらに1768年には『空間における方位の区別の第一根拠』(以下『空間における方位』と略す)を公けにしている。このことは彼の問題意識のなかでふたつの問題が

平行してとらえられていたことを示している。我々はカントの体系展開の起点を空間把握の問題から照明していきたい。そのために1768年の『空間における方位』での空間把握から明らかにしてみよう。

第一章 前批判期における空間把握

カントは1768年の論文『空間における方位』のなかで、はじめて空間把握を主題として論じている。表題からも明らかであるように、この論文は、「根拠」としての空間について論じたものである。そしてこの点にカント自身もニュートンやL. オイラーとの問題意識の相違を認めている。すでにみたように、カントは、前批判期を通じてほとんどニュートンの絶対空間説を支持している。そのことは、この論文でも同じである。しかし、ここでのカントの目的はより限られたものである。その目的とは、「絶対空間は一切の物質の現存在から独立であって、それ自身物質の合成の可能性の第一の根拠としてそのものの実在性を有するという証明」を示すことであった⁽³⁾。つまり、カントはこの論文のなかで、絶対空間が実在するという「確信的根拠」を具体的な仕方で呈示しようと試みているのであり、たんにニュートンやオイラーの説を反復しているのではない。

カントのこのような意図は重要である。カントは、ここで「確信的根拠の明示」ということについてはオイラー説さえも不十分であるという批判を述べている。すなわち、カントは、オイラーの論文が、絶対空間を仮定しない場合に一般的運動法則の想定が不能となるという困難を示すだけで、法則の適用から逆に絶対空間の明証性に至る方向においては不備であることを指摘している⁽⁴⁾。

このようなカントの問題意識は、彼自身いつているように、「数学的というよりは哲学的」⁽⁵⁾なのである。このことは、ニュートンの自然哲学に対する態度と対照させてみると興味深い。ニュートンにとって、自然哲学は数学的に記述できる現象の範囲内にとどまらなくてはならない。それゆえ、ニュートンは、『プリンシピア』（『自然哲学の数学的原理』）のなかで「私は仮説を捏造しない」ということができたのである。これは、つまり、その必要がないことをいつているのである。「万有引力」、「無限小」といった、それ自体考察すれば「魔術的なもの」になりかねない概念をもちいながらも、ニュートンはあくまで数学者としての厳密さを崩そうとはしない。ユークリッド的演繹体系によってこれらの概念の明証性は補完されているのである。

しかし、カントは絶対空間に関してそのもの自体の存在を明らかにする証明を必要とした。カントはどのようにしてこの明証性を論証しているのであろうか。カントは「不一致対称物」(incongruentes Gegenstück)の事例を示している⁽⁶⁾。

その事例の内容は、以下のようなものである。平面上の図形は、互いに等しく、類似していれば(einander gleich und ähnlich)、互いに重ね合わせることができる。これはつまり、直観的な「合同」(congruent)の概念であるが、立体的延長では、互いに等しく、類

似していても重ね合わせることができない場合がある。それらをカントは「不一致対称物」と呼ぶ。その典型的な例は、鏡像である。すると、我々の右手と左手は、互いに鏡像的な関係にあるから、不一致対称物とみなされる。右手と左手は、等しくかつ類似しているにもかかわらず、互いに重ならないという点でのみ差異をもつ。この差異は、外的構造の相違に基づく差異ではなく、部分どうしの秩序によらない「内的差異」(ein innerer Unterschied)であるとカントはいう。

この「内的差異」ということでカントは何を意味しているのだろうか。少なくとも「内的」という言葉は「外的」という言葉とは対立した意味で使われ、そのことによって、物体そのものの形象から独立した次元の秩序を示していることは明らかである。はじめにみたように、デカルトは、物体即延長説から、空間を物体の現存在から独立した実体として考えることをしなかった。それに対して、モアは、精神をもまた、可透的な延長をもったものとして認めたため、空間を物体から独立した存在意義をもったものとして考えたのであった。カントはこの論文のなかで「神が一本の手を創造したならば、それは必然的に右手か左手のいずれかでなければならない」という⁽⁷⁾。カントは事物から独立した秩序への関係のなかに、事物の形象の絶対的根拠を求めているのである。このことからカントがここで把握した空間は、モアと同様に、事物を越えて独立した実体であることがわかる。モアやニュートンはこの空間を、精神的な秩序 — すなわち神と考えたのであった。カントは、「不一致対称物」の例を挙げ、この空間の存在の確信的根拠を明示したのである。

カントは、この例によって、事物の秩序と空間を同定するライプニッツ学派の空間把握を論駁しているが、この論文のなかで、同時にライプニッツ自身にも言及している。彼は論文の冒頭で、ライプニッツの構想した「位置解析」(analysis situs)を、「空想以上にはでなかった」としながらも、カント自身のこの論文での意図とライプニッツがもっていた意図との類縁性を示唆している⁽⁸⁾。絶対空間説の立場からライプニッツ学派の空間把握の批判がもくろまれている論文で、ライプニッツの方法との類縁性が逆に示唆されているとはいったいどういうことであろうか。我々は「位置解析」のもっていた内容を見る必要がある。

ライプニッツは、『位置解析について』という小論文のなかで以下のように自分の構想した位置解析の内容を説明している。

「私は、その計算を位置解析と名付けよう。なぜならその計算は、図形が計算の中に記号を使って精神的に写されていれば、実際に描かれていなくとも、位置をそのまま直接に表出するのである。そして、感性的直観が記号について認識するすべてのものは、確実な計算方法、証明方法によって記号から導出されるのである。それと同時に、直観能力では十分でないようなあらゆる問題をさらに探求することができるだろう。その結果、ここに素描された位置の計算は、感性的直観の補足、否、その完成を、表現するのである。」⁽⁹⁾

つまり、ライプニッツの位置解析とは、感覚的知覚が介入せざるをえない量の立場を含んでいた幾何学を、幾何学と代数学とを架橋することで、非具象的に、つまり感性的直観に頼らない新しい質の立場から遂行しようとするものであった。彼は、『人間知性新論』において、経験論に反対する自らの立場をプラトンになぞらえて反論しているが、この位置解析にも彼のイデア的傾向が如実に現れている。ライプニッツが質の立場というのは、デカルトの解析幾何学を量の立場によるものといって批判するためであったが、この「量と質」という区別はいったい何であるのか。彼は次のようにいう。

「図形は一般的に数量のほかには一定の質または形態をもっている。同じ量が帰属するものが相等 (gleich) であるように、同じ形態をもつものは相似 (ähnlich) ある。」⁽¹⁰⁾

量的に等しいもの（相等）は、ライプニッツによれば感性的にとらえられる尺度を必要としている。例えば、物差しのようなものである。しかし、幾何学において、三角形と円とを区別する本質といった、個々の図形のイデア的側面に着目すれば、量の立場での等しさのほかに、質の立場からの等しさの概念が与えられねばならない。それが、彼のいう相似性 (Ähnlichkeit) の概念である。彼はこの概念の基礎に「不可識別者同一の原理」をおいている。彼の考えている「質」とは、「ひとつの対象の中にそれを考慮するだけで個別的に認識でき、第二の対象との比較に役立つような何ものかを精神に展示する」ものであり、「そのとき、比較対象が直接、間接に尺度としての第三の対象に引き合わされることを必要としない」ものである⁽¹¹⁾。彼はこの立場から、幾何学的考察の対象を、事物の現存在、感性的表象から引き離し、悟性のみで考察できる徴表に限ろうとする。すなわち、空間図形を全く非具象的に扱うことをめざしているのである。そこでは、幾何学的認識に伴う必然性の根拠は、それ自体実在的な空間ではない。必然性は、個々のものに本来備わっている質に基づくのである。彼は、その質を認識することを「精神の目で見ること」にたとえている⁽¹²⁾。

ライプニッツの意図している「位置解析」は、精神の目によって感性的事物の非感性的本質をとらえようとしている点で、ニュートンに対置された彼の空間把握とは別の意味を持っている。ここでは、事物の現存在から空間が構成されるのではなく、個々の図形がもっている事物から超越した「質」が、精神的な秩序に拠り所を求めていると考えられているのである。

当時、ライプニッツの著作は現在見られるようなかたちで流布していなかった^{〔補註〕}。そのため、カント自身が彼の位置解析についてどれほどのことを直接に知っていたのかは定かではない。しかし、カントは、1764年の『自然神学と道徳の原則の判明性』という論文のなかで明らかに「位置解析」の思想に言及しているのである。彼はその論文のなかで、数学の方法と哲学の方法を比較し、数学は総合的に定義から始めることができるのに対し、哲学は定義から始めてはならず、分析的でなければならぬと主張している。そして、数

学者において、その必要がないのに分析的な方法が用いられてしまった例として、Ch. ヴォルフが幾何学において相似性の概念を哲学的に解明しようとしたことをあげている。この内容は、位置解析の思想を受け継いだものである。つまりライプニッツの数学に応用された分析的方法は、間接的であったにせよ、哲学と数学的方法的相違を探求していたこの時点のカントに対して、大きな刺激を与えていたのである。

カントは、このライプニッツの方法を、ニュートンの絶対空間を支持するために『空間における方位』で用いているのである。そう考えれば、カントからライプニッツへの言及も故のないことではない。カントが「不一致対称物」によって示したのは、右手と左手の感性的表象を捨象し去っても残る「内的な差異」がある、そして、その区別の根拠は経験的事象を越えた絶対空間である、ということであった。しかし、ここでカントは、右手と左手の「内的な差異」を、ライプニッツが質という言葉で表したものと同じものにみているのである。

ここでのカントの空間把握を、質の立場によるものというとなれば、おなじ空間把握は1770年の『就職論文』にも引き継がれている。なぜなら、この論文でも、不一致対称物の例は内在空間の明証性を示すために用いられているからである⁽¹³⁾。カントは、『就職論文』において、空間が我々の感性の形式として主観に内在したものであることをはじめて主張した。この論文に即して生じる疑問は、『空間における方位』において、質の立場からでもやはりニュートン説を支持していたカントが、いったいなぜ空間を内在化させたのかということである。

ニュートンは空間を神聖化し、絶対空間として感性的事物の秩序からの超越性を強調したが、同時に現実の物理的秩序の根拠として、被造物への絶えざる介入を認めた。彼は、自分の自然哲学が、神の栄光を顕すものであると信じていた。ニュートンとライプニッツの空間把握の相違は、一面において、こうした神の居場所を空間に認めるか、否かに関係していた。ライプニッツが、クラークを通じてニュートンに与えた非難は、空間と神の同一視が神を世界に従属させ、神の超越性を損なうということであった。ライプニッツの神は、世界を最善に創造したのちにはもはや世界と関わりをもたない哲学者の神である。事実の生起は充足理由律によって決定される。そのため、ライプニッツにとっては、ニュートンの神は合理性を欠いた世界靈魂のように思われたのである。

この二人の空間把握の対立は、カントの空間把握 — 内在化された空間によって完全に無意味にされた。カントが空間を内在化する過程には、ライプニッツの質の立場が大きく影響している。カントは、ライプニッツ的方法によって精神的秩序として空間を把握しながらも、ニュートンのように我々の外部に神としておくことをしなかった。彼が発見した精神的秩序は、人間の内に求められた。つまり、彼はその質的把握の源泉を人間の精神のうちに見出したのである。

カントが、精神的秩序として空間を見出しながら、それを人間の主観に関係づけたのには、前批判期から彼が抱いていた問題意識も関係している。それは、大陸で行われていた

ライプニッツ学派の用いていた「事象性」(Realität)という概念が、事物の現実存在と可能的存在を区別しない形而上学的な性格をもっていたため、一方で、ニュートンやD. ヒュームらのイギリス経験論に接していたカントには、到底受け入れることができなかった、ということである。カントは、1755年の『形而上学的認識の第一の原理』という論文で、ライプニッツ学派が第一原理としている矛盾律を退けるとともに、Ch. ヴォルフによる充足根拠としての根拠の定義を批判し、充足根拠という言葉に換えて、「決定根拠」という言葉を用いることを提案している。カントは、そこで、「充足という言葉はあいまい」であり、「どの程度充足的であるのかが十分明確でない」のに比べ、「決定するということはあらゆる反対を退けるという仕方では指定することであるから」十分明確であると主張している⁽¹⁴⁾。充足根拠の概念がもつ不明確さは、ライプニッツ学派の「根拠」の所在のあいまいさに起因している。これに対して、カントは、根拠の所在を、「充足している」とされる事物の秩序から「決定する」という主観の判断作用の中に置き換え、根拠における主観の作用を重視しているのである。つまり、ここからカントは、空間の明証性を論じるさいにライプニッツ的方法を用いたが、ライプニッツとは異なり、把握された精神的秩序としての空間を人間の主観に関係づけたのである。カントは精神的秩序としての空間を人間の主観に内在化させた。それは同時に、世界から神聖性を剝奪し、人間の精神に目を向けることを意味したのである。

第二章 批判期における空間把握

前批判期のカントは、精神的秩序として空間を把握したが、それを感性の形式とみて人間の主観に関係づけた。そしてこのことは、神の特性と空間の特性を類比的に論じていた空間論争を、その前提から覆したのであった。しかし、批判期のカントは、『批判』のなかに、空間の無限性や神の存在論的論証を批判する箇所を独立してあたえ、「超越論的弁証論」でそれをおこなっている。そしてそれに応ずるように、批判期のカントの空間把握は、前批判期のものとは異なったものに移行している。つぎに批判期における空間把握に目を向けよう。

批判期におけるカントの空間把握は、『批判』の「超越論的感性論」第一節でその概要を知ることができる。しかし、批判期のカントは空間の先天性といった特性を順次述べていくだけで、『空間における方位』の論文で試みたように、空間が事物の現存在の根拠であるという証明を正面から与えようとはしない。カントは、その節で空間を「形而上学的解明」と「超越論的解明」というふたつの異なった仕方では解明している。「形而上学的解明」について、カントは以下のような説明をしている。

「私が、ここで解明(expositio)というのは、ある概念に属するものの(たとえ詳細に渡らないでも)明瞭な表象を意味する。そして、かかる究明がこの概念をアプリアーに

与えられたものとして明示するものを含む場合には、それは形而上学的解明と呼ばれる。」⁽¹⁵⁾

カントのこのような説明は、『批判』A版には見られず、B版で付加されている。カントはこの解明のなかで、空間は、詳細には渡らないが、アプリアーな概念として我々に与えられると述べている。前批判期のカントは、まさしくこの空間の先天性について証明を求め、そこから空間を質の立場で把握し、内在化したのであったが、批判期のカントはもはやそうした問いをひかえているようにみえる。

しかし、この空間の先天性の唐突な提示にはカント自身不十分さを感じていたようにもとれる。それは、彼がこの解明に続いて「超越論的解明」をおこない、形而上学的解明の補足を意図しているからである。

「あるアプリアーな原理に基づいて、別のアプリアーな認識の可能が理解されうる場合に、かかる原理としての概念の説明を超越論的解明という。」⁽¹⁶⁾

だが、この説明も空間の先天性の十分な根拠とはいえない。ここで述べられていることは、アプリアーな総合的認識、例えば幾何学的認識の可能を理解するためには、形而上学的解明で述べられた空間の諸特性が前提とされねばならないということに過ぎない。前批判期のカントがオイラーに対しておこなった批判が、ここではカント自身に当てはまる。なぜなら、この超越論的解明で、カントは、形而上学的解明の裏づけのために幾何学的認識の普遍妥当性を援用しているに過ぎないからである。

カントが空間の先天性の提示に関して逡巡しているのは、カントが空間を人間の主観に内在化させたことが原因となっている。カント以前の空間論争では、モアとデカルトとの対立に見られるように、空間を事物の秩序から独立した実体と考えるためには、神との類比を必要とした。デカルトの主張した空間の無際限性は、経験の有限性を示すのみで、どこまでも事物の秩序のうちにとどまっている。空間には、神の属性である無限性が付与されて、はじめて事物の秩序との隔絶が可能になったのである。また空間の独立した存在論的意義もそこから導き出された。なぜなら、この「無限性」という概念はそのものうちに必然性を含む概念だからである。例えば、N. クザーヌスは、数学的想像力によって、無限においてはすべての相対的な規定が廃棄され、必然的に絶対的なものなかに包摂されると述べた（対立の一致）。空間もまた、神の特性を帰せられることによって、自存性を得たのである。しかしカントは、空間を主観に内在させることで、有限なもの内に限定してしまった。それゆえ、空間はもはや絶対者としての意味を失い、自存性を主張できず、先天性（超越性）を端的に表現できないのである。カントが空間の先天性の提示に戸惑いを見せているのは、このような理由によってである。

ここから、批判期の空間把握においては、空間は感性の「形式」であり、その实在性を内容に求めなければならなくなる。批判期の空間把握が、超越論的観念性と経験的实在性

という逆説的な性格を同時にもっているのは、このことの故である。空間は感性的事物から超越したものでありながら、その存在根拠を内容としての事物の秩序に求める。カントはそのことを「我々に可能な直観は感性的直観だけである」と表現した。空間は「アプリオリな必然的表象」としてすべての外的直観の根底に存在しているにもかかわらず、反対に、それらの外的な感性的直観の制約を離れては「無」なのである。同じことをカントは、「純粹悟性の原則の体系」のなかの「直観の公理」で「すべての直観は外延量である」と簡潔に示している⁽¹⁷⁾。空間それ自体は純粹であるにせよ、我々が空間を表象するには「一本の直線を考えのなかで引いてみないことには」不可能である⁽¹⁸⁾。こうして純粹空間の妥当性は、外延量としての直観に限定されている。しかし、カントがここからふたたびデカルトのように、空間と物体（延長）とを同一視することはなかった。その理由は、空間を主観に内在化させた過程を通じて、カントは、人間から事物へはたらきかける「捨象」という自発的な思惟作用が、空間に明証性を与えることを知っていたからである。批判期のカントがしている空間の解明(Erörterung)は、「純化」ということであり、空間の感性的内容に自発的にはたらきかけ、空間を把握しようとする彼の態度をよく示している。カントは経験の捨象から純粹空間に至る道筋を以下のように記述している。

「私がある物体の形象から、悟性の思惟するもの、例えば実体、力、可分性のようなものを分離し、また同様にして、感覚に属するもの、例えば不可入性、固さ、色などを分離しても、かかる経験的直観のなかにまだ我々に残されているものがある。それは、延長および形態である。そしてかかる空間的なものが純粹直観に属するのである。」⁽¹⁹⁾

このような空間把握は、ライプニッツの言葉によると、量の立場からのものである。空間の実在性は、ある感性的尺度によって我々に把握されるのである。

このように、カントは前批判期から批判期にかけて、質の立場から量の立場へと空間把握の方法を転換させている。しかしこのことは、カント自らによってはっきり自覚されていたのである。カントは1783年の『プロレゴメナ』の第13節で『空間における方位』で用いられた不一致対称物の例を再び挿入している。この例は、先に見た通り、質の立場からの空間把握を行うためのものであったため、量の立場からの空間把握を行っている『批判』のなかでは用いられていない。しかし、カントは、『プロレゴメナ』のなかで、この不一致対称物の例を、量の立場からの彼の空間把握に適合するように再解釈しているのである。

カントは『プロレゴメナ』13節で右手と左手の内的差異に言及したのち、つぎのようにいっている。

「これらの対象（右手と左手）はそれ自体としてあるような、また純粹悟性が認識するようなものではない。むしろそれは感性的直観つまり現象であり、その可能性はそれ自体として我々に知られていないある物のほかの何か、つまり我々の感性への関係に基づ

いているのである。ここから空間は外的直観の形式であり、部分空間の内的規定性は全体空間の関係の規定性によってのみ可能である。部分空間は（外的感官への関係に対して）全体空間の部分である。つまり部分は全体によってのみ可能である。」⁽²⁰⁾

前批判期で質的な立場から精神的秩序としての空間の明証性を主張したカントが、ここでは、批判期での量の立場からの空間把握を行っている。そして、内的規定性は全体空間への関係の規定性によって可能になるとされている。つまり、部分の全体への関係はすでに所与としての部分を前提としているのである。モア、スピノザ、マルブランシュが精神的秩序としての空間の特性のひとつに数えた不可分離性は、部分と全体という把握方法によって退けられている。カントの不一致対称物の再解釈は、質の立場から量の立場への空間把握の変化を明白に語っているのである。しかしながら、量の立場からの空間把握は、形式としての空間は、内容である感性的直観を媒介としなければ把握されないという制約をもつことによって、かえって形式と内容の区別を明確なものにした。つまり、我々に与えられる感性的直観は、空間の内在化を通じてそれ自身がそのものを超越したものと関係づけられ、そこから限定を受けたのち、はじめて「現象」という独立した意義をもつようになったのである。このような形式と内容の出会われる場所は、ほかならぬ認識主観のうちである。そのため、ここに「反省」の立場が新たな超越性として問題になってくる。この立場からは、経験そのものが対象にされ、意義づけられるのである。カントの関心は、我々にとって可能な経験の条件を究明することに移行するのである。従って、我々は次に、空間把握固有の問題が、どのような経過を経て「可能的経験の原理」に結びついたのかをみてみよう。

第三章 空間論の展開

カントは前批判期から批判期にかけて、質の立場から量の立場へ空間把握を転換させたが、そのことによって、感性における形式と内容のそれぞれの権限が及ぶ範囲を明確化した。我々は、カントによってなされたこの区別が、感性から現象一般に及んで考察されるにつれ、現象体と本質体の区別を生じさせていることを示すことができる。この新たな区別は、我々にとって可知的な世界と不可知的な世界の区別となり、可能的経験の原理とともに、カントによって存在神学批判の主導原理にされる。そこでまず、空間把握の問題がどのように現象体と本質体の区別に結びつくかということから見ていきたい。

カントは、『批判』のなかの「経験的な悟性使用と超越論的な悟性使用との混同によって生じる反省概念の二義性」という箇所、感性と悟性の超越論的区別を欠いていたライプニッツの哲学を批判している⁽²¹⁾。そこでカントが行っている批判の主な論点は、ライプニッツが感性の形式として空間を把握できなかったため、感性を悟性と異なった独自の認識源泉と見なすことができず、両者を混同し、そこから本質体と現象体の混同すらも引

き起こしたということである。カントはこのライブニッツ批判を、今まで問題になってきた「内的なもの」、「外的なもの」という概念に即して行っている。

前批判期の空間把握は、質の立場から行われていた。そこでは、内的なものは、質と同じに精神的な秩序を表現するものであった。しかし、批判期のカントは、空間把握に関して、外的なものから内的なものに至らなければならないという制限を課されていたため、内的なものを直接に把握することは不可能とされねばならなかった。我々がいくら現象的実体を探求しようとも、我々が見出すのは「絶対的—内的なもの (Schlechthin—Innerliches)ではなく、相対的—内的なもの (Komperativ—Innerliches)にすぎない」のである⁽²²⁾。だが他方で、「絶対的—内的なもの」は、「超越論的客観」あるいは「本質体」として、現象体に対置されなければならないこともまた明らかである。

それらの概念の持つ意味は、カントが、空間把握の考察にともなって疑問に付したものであった。従って、カントはここで前批判期から批判期への—質の立場から量の立場への自分の空間把握の変化を省みながら、それらの概念により明確な規定を与えているのである。彼は、前批判期に空間の実在性の証明に用いた「内的なもの」について、次のように述べている。

「単なる概念の面から見れば、内的なものはあらゆる関係、すなわち外的規定の基体である。従って、もし私が直観のあらゆる制約を捨象して、もっぱら物一般の概念に固執するとすれば、私はあらゆる外的関係を捨象することができ、そしていかなる関係も意味しない、単に内的規定のみを意味する概念が残存するに違いない。」⁽²³⁾

我々は、あらゆる直観の制約を捨象することによって基体としての内的規定に向かい合うことができる。その基体とは、あらゆる外的関係を越えた一般的なものである。すべてのものに透入可能でありながら延長をもった精神的秩序を、神との類比で端的にとらえていた哲学者たちは、このような基体をそのまま実体と認めていた。ライブニッツはニュートンのように絶対空間こそ想定しなかったが、感性的事物を超越した内的なものであるモナド—表象を付与された単一体を、直接に彼の哲学に導入した。

しかし、このように感性的事物を知性化することは、感性与悟性を峻別するカントの立場からは、明らかな誤謬である。ライブニッツはニュートン同様、超越的原理をそのまま対象化し、感性与悟性の区別を無意味にしているのである。カントは、これに対し、現象の基底には、どこまでも質的なものとの断絶を示す媒介（空間）が作用していることを次のように述べ、ライブニッツの質的な現象理解を退けようとしている。感性の形式としての空間は、モナドの表象から連続的に、判明、不判明という基準によって感性的表象に至ろうとするライブニッツには説明のつかない要因である⁽²⁴⁾。

「しかし、直観には、単なる概念中には全く存在しないあるものが含まれており、このあるものとは単なる概念によっては認識されえない基体、すなわち空間を与えるのであ

る。」⁽²⁵⁾

前批判期のカントは空間の先天性の論証をここまででやめていた。つまり、彼は、概念としては全く等しいもの（右手と左手）が現象として与えられた場合、不一致であるという事実から、現象一般の基底として空間が存在しなければならないことを述べたのであった。しかし、批判期のカントにとってこの論証をそのまま容認することはできない。カントは続けて次のような自己批判を行っている。

「… 絶対的に内的なものを欠いては如何なるものも単なる概念によっては表象されえないからといって、これら単なる概念中に含まれている物自体や物自身の直観のうちにも、何か絶対に内的なものを根底にもたぬ外的なものは決して存在しないということとはできない。」⁽²⁶⁾

ここでのカントの自己批判の内容は、外的関係を捨象し、絶対的に内的なものへ向かう現象から観知的なもの、本質的なものへの遡及が可能であるにしても、我々は決して純粋なもの（純粋空間）に到達することはできないので、すべての外的なものはその根底に内的なものをもつというように一般化して考えることはできない、ということである。我々はこのようなカントの自己批判のなかに、空間の実在性について内容としての感性的直観という留保をつけざる得なかった批判期の空間把握の態度を読み取れる。

しかしこの留保によって、カントが直ちに内的なものとの外的なものとの区別を廃棄してふたたび懐疑論に陥ることはなかった。両者の結びつきはある必然性をもっている。カントはここではっきりと、「必然性は捨象に基づいている」という⁽²⁷⁾。つまり、この必然性によって、我々の認識の対象は現象であるが、それは捏造されたものではなく、独立の現実性を持ち、本質体とは区別されねばならないことが示されるのである。

このように、空間把握の過程で空間が感性的事物から超越していることを示す方法となっていた「捨象」は、感性的直観を欠いた純粋空間のもつ無から、反対に現象体の持つ意味を限定する。そして同時に、「感性的直観の欠如体」として単に否定的であった無が肯定的に把握され、現象体に対峙した本質体の意味を帯びてくる。本質体は「感性的直観の制限から全く解放された本質が存在しないだろうかという課題」として受け取られる⁽²⁸⁾。本質体は純粋空間の無としての側面からは、「なら示されうる直観の対応しない概念の対象」であり、「皆無の概念」であるが、この場合の無は、「自己矛盾する概念の対象」としての無のように「不可能なもの」とみなすことはできない。それはむしろ可能でも不可能でもない蓋然性にとどまり続ける無である⁽²⁹⁾。内在化された空間は、感性的事物に対する超越性をもっていながら、その実在性には内容としての感性的直観が必要とされた。しかし、捨象によって生じる感性的直観の欠如体としての無が、今度はふたたび感性的事物を超越した無限性をもつものとして、本質体としての無の意義に転化される。精神的秩序としての空間がもっていた無限性は、否定性の極において、現象体のかなたに自らの領

野を回復するのである。

本質体の固有の意義の確定が、以上の経過を含むものとする、本質体もっている「積極性」と「消極性」の二義性は、カントが精神的秩序であった空間を内在化していった過程を考慮せずには理解できない。本質体もっている積極性は、感性的事物の制限から放たれた精神的秩序が主観に内在化され、ふたたび感性的事物の制限を受けたのち、再度超越化していく過程によって獲得される。ここで、我々は、カントが感性的事物の制限からの超越を、捨象という能動的思惟作用から基礎付けていることに注意したい。それはつまり、彼の実践哲学で、感性的諸条件の捨象が、行為の自律性によって積極的に転化される過程と軌を一にしているからである。

ここまで見てきたように、本質体の意義が空間把握の過程によって限定されていったという事実は、他方で、カントの存在神学批判の内実に深い関わりをもっている。次にそれにふれよう。

従来、カントの存在神学批判は、「可能的経験の原理」を唯一の武器として行われていると考えられてきた。つまり、存在神学に対するカントの異論とは、「事象性の総体」という概念のうちに現実存在を数え入れ、そこから神の存在を推論し、「超越論的仮象」を生じさせることに対するものとして要約できると考えられてきた。しかし、存在神学の歴史を周到なテキスト分析によって跡づけたD. ヘンリッヒの解釈によれば、カントのこの問題への寄与の本質は、それだけに還元されるものではないとされる。なぜなら概念と現実存在の混同を批判する「経験主義的異論」は、カント以前にもP. ガッサンディやトマス・アクィナスにもよって主張されている。そこからヘンリッヒは、カントの存在神学批判の本質を「必然的存在者」の概念のもつ意味の明晰化にみている⁽³⁰⁾。

「必然的存在者」の概念のもつ必然性の意味が明晰化されるとは、いったいどういうことなのだろうか。我々は、この問題もやはり空間把握の問題と関連していると想定できる。我々は、さきに、空間が独立した実体と見なされるために、精神的秩序との同一化、すなわち、神聖化を要求したことを見てきた。ここから哲学者たちは、世界そのものに直接に無限性を付与したが、それはすなわち世界をそのまま必然的なものとして把握することを意味したのであった。なぜなら、無限性のなかではすべての制限が廃棄され、一者に帰せられるからである。スピノザ、マルブランシュがモアの聖化された空間から逆に神にふさわしい特性をひきだし、さらにそれを「必然的存在者」とすることができたのは、「聖化された世界」が容認されていたからでもある。空間と神を同一化することは、絶対者がその特性とともに世界内で論じられる前提となるのである。しかし、カントは、空間の主観への内在化によって、存在神学が使用していた神の特性（唯一、不可分、無限、不動、等質）を世界から奪い取ることができた。それ故、カントは、「必然的存在者」の概念を、主観における認識能力との関係のみによって、「可能的経験の原理」の制限のもとに考察し、明晰化することに成功したのである。

カントの存在神学批判が彼の空間把握の変遷と結びついていることを、我々は、前批判

期に彼が公にした『神の現存在論証』から批判期にかけてのカントの原理的变化から考えていくこともできる。前批判期における『神の現存在論証』のなかでのカントは当然ながら質の立場からの空間把握を行っており、空間の内在化から生じる空間概念の二義性に気づいていなかったため、本質体のもつ蓋然的性格に思い至っていない。そのため彼は、可能性の概念における論理的意義と実在的意義を区別していないのである。カントはこの論文のなかで、「現実存在は何らかのものの述語または限定ではない」として⁽³¹⁾、現実存在が思惟の質料とは独立の意義をもっていることを認めておきながら、つぎのように、「唯一可能」な神の存在論証を論理的必然性のもとに行っている。

「いかなる可能性も、すべての思考の基礎となるある現実的なものを前提とする。したがって、自らを廃棄すればすべての内的可能性一般をも廃棄することになるような現実性が存在する。しかし、自らの廃棄または否定がすべての可能性を根絶させるようなものは、絶対に必然なものにはほかならない。」⁽³²⁾

この論証は、論理（矛盾律）のみによって遂行されており、実在的必然性は論理的必然性の制約下におかれている。なぜなら、この時期のカントにとって無とはそれ自身矛盾したものとしての論理的無としてしか理解されていないからである。しかしながら、さきにもみたように、空間の内在化を契機として空間把握が質の立場から量の立場へ移行するにつれ、外的なものとの内的なものとの関係が問われ、感性における形式が内容によって実在性を得るようになった結果、論理的必然性は実在的必然性の制約下におかれ、制約関係は逆転した。これが「必然性」の概念の明晰化である。本質体としての無が、現象体との対比によって逆に現象体を限定し、「可能的経験の原理」によって存在、非存在を指定する権能を得たのである。それ故、批判期のカントはつぎのように述べることができた。

「概念は自己矛盾しない限り常に可能である。これが可能性の論理的徴表であり、これによって概念の対象は『不合理なもの』(nihil negativum) から区別される。それにもかかわらず、この概念は空虚な概念になることがある。それは概念が産出される総合の客観的実在性が別に示されない場合である。だがこのことは上述したように可能的経験の原理に基づき、分析(Analysis)の原理（矛盾律）に基づくのではない。このことは概念の可能性（論理的）から直ちにももの可能性（実在的）を推論してはならないという警告のひとつである。」⁽³³⁾

カントの存在神学批判は二つの側面をもっていると言えるであろう。それは、必然的存在者の概念の明晰化、および「可能的経験の原理」からなされる概念と現実存在の混同に対する異論である。我々はその両者が空間把握の問題と深く関わっていることを明らかにした。すなわち「必然的存在者」の概念の吟味の前提としては、空間の内在化ということが、そして「可能的経験の原理」の確定には、内在化から派生的に生じた本質体の意義が、それぞれ関与している。ここから我々は、カント哲学の根本的教説もやはり空間把握の問

題から生じてきていることを知ることができるのである。

【注】

『純粋理性批判』からの引用は原著第一版をA、第二版をBとしてそれぞれの頁づけを示した。その他のカントの著作はアカデミー版カント全集の巻数をローマ数字で示して引用する。但し、『全集』と略記したのは理想社版カント全集からの引用である。

(1) 「空間論争」については、A. コイレ、『閉じた世界から無限宇宙へ』（横山雅彦訳、みすず書房、1973年）が詳しい。よりコンパクトな記述としては、H.Heimsoeth, *Studien zur Philosophie Immanuel Kants*, (Köln,1956,) の第2章、“Der Kampf um den Raum in der Metaphysik der Neuzeit”を参照されたい。

(2) 批判期以前のカントは、1756年の『物理学的单子論』で明らかにニュートンの影響が見受けられる空間把握を行っているが、1755年の『形而上学的認識の第一原理』において、彼はすでにライプニッツ学派の空間把握に対して万有引力説の擁護を行っている。以後、カントの絶対空間説支持は1770年の『就職論文』まで変わらない。

(3) II, S.378.

(4) *Ibidem.*

(5) *Ibid.* S.377.

(6) Vgl. *Ibid.* S.382.

(7) *Ibid.* S.382 ~ 383.

(8) Vgl. *Ibid.* S.377.

(9) G.W.Leibniz, *Hauptschriften zur Grundlegung der Philosophie* Bd. I ,Phb., S.76.

(10) *Ibid.* S.71.

(11) *Ibid.* S.72.

(12) Vgl. *Ibidem.*

(13) Vgl. 『全集』 3巻 p.242.

(14) Vgl. 『全集』 2巻 p.23.

(15) *Kritik der reinen Vernunft*, Phb., B38.

(16) *Ibid.* B40.

(17) *Ibid.* A162=B202.

(18) *Ibid.* A163=B203.

(19) *Ibid.* A21=B35.

(20) IV, S.286.

(21) Vgl. *Kr.d.r.V.*, A260=B361.

(22) *Ibid.* A277=B333.

(23) *Ibid.* A283=B339.

(24) Vgl. *Ibid.*A44=B62.

(25) *Ibid.* A284=B340.

(26) *Ibidem.*

(27) *Ibid.* A285=B341.

(28) *Ibid.* A288=B344.

(29) Vgl. *Ibid.*A292=B348. 「無」の表。

(30) D. ヘンリッヒ、『神の存在論的証明』（本間、須田、中村、座小田訳、法政大学出版局、1986年）、第二部、「カントの存在神学批判」を参照されたい。

(31) II, S.72.

(32) II, S.83.

(33) *Kr.d.r.V.*, A597=B625.

[補注] カントとライプニッツ著作との関係については、近年の研究から、批判期におけるカントが、1768年にジュネーヴで出版された Dutens 版の『ライプニッツ全集』を手にしていたことが明らかになった。しかし、前批判期のカントは、恐らく、ヴォルフの数学的著作を通じてライプニッツの思想に接していたに過ぎないであろう。（この補注は、酒井潔岡山大学助教授の指摘による。）

（うえた・とおる 筑波大学大学院哲学・思想研究科在学）